

十八日の記は、前夜のことを反省して悔いて記したものである。

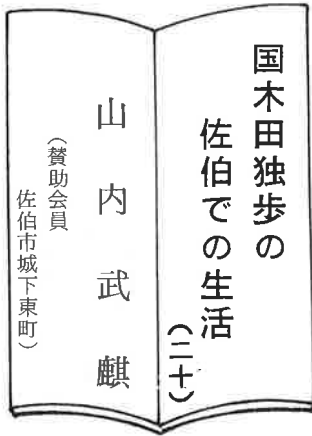
宇宙は茫茫として窮まりない。その間に生滅しているこの人類とは何か。古人は今はいない。今の人もまた必ず古人となる。この生滅している人間とは何か。心配したり、楽しんだり、争ったり、惑ったり、知ると云ったり、知らぬと云う。罪と云ったり、義と云う。これは一体何か。

これは事実であり、その事実をどうしようもない。

この人、この天地、この天地にある人類、みな意味深く大きい。

人の失望、  
罪悪、災厄を  
救いときほぐ  
してくれるの  
は神の教のみ  
である。愛の  
福音のみであ  
る。

一生は忽ち



終る。短いと云ってもこれが人の命である。短いとは長いとの比較語である。命は命であって意味深いものである。意味ある生き方をしなければならぬ。

人を救へ。然り神の教もて。

人を救へよ。ア、人を救へよ。天吾をして人を教へと命じ給ふ也

と、自分の天命は人を救うことだと信じている。にがい経験からの苦しみを忘れようとしている。

十九日の記には

昨日、衆と共に漫步す、午後也。午前会堂出席。

電報を打つ、収二より何の音づれなきを以て心配に堪へねば也。

と、ある。

衆と共に漫步す。午後也。とあるが、富永日記を見ると、飯沼・尾間・薬師寺兄弟・山口・田中・独歩・富永の外に二三人の少年たちと、郊外に出て鶴岡の野を散歩している。海福寺の境内、星の宮、瓦焼き場、田の上、溝の辺を歩き廻っている。

また、独歩の記にはないが、この晩富永は独歩を訪ね

ている。富永日記を見ると、夜になって月が冴えている。今朝の約束で餅を二つ国木田先生の許へ持って行く、先生は丁度よかった。徳富氏から手紙が来ていると早速見せた。先生が先日自分のことを依頼した返事である。もとより端書で極く簡単であるが……此兒可愛差当リヨキ地位ハラザレド自愛勉強セヨト伝へクレ……とあって、殊更自愛という字に傍線をつけてあった。自分は大変喜んだ。今もなおうれしい。先生は「先づ一つの文章を書け。そして直接に徳富と文通したらよかろう」と言った。自分は喜んだ。と、ある。

二十一日の記には

二十日及び十九日の事を記すべし。  
と、書いて、二十日と十九日の記を書いてある。

十九日は正午前、富永・薬師寺・並河の三君が来訪、一緒に葛の浜まで散歩した。晴天の好い日であった。収二と父上から手紙が来て、柳井印刷所の譲り受けはむづかしいと云ってくる。自分はすぐ返事を書いて是非とも成功しなければならぬ。譲り受けがむづかしいなら借り受けるよう云ってやる。

昨日二十日の午前日置氏が来訪した。石丸の一件についてである。

独歩が石丸に師弟の關係を断つと云ったのでその経緯を糺しに来たのであろう。

夜は学校で生徒を集めて演説した。帰路四五人と一緒に富永方に集まって話した。

今夜はまた父上から来状。今返書を認めて是非ともこの事業を創立せねばならないと説いた。

夜は祈禱会に出席して、神に祈った。

この学校で生徒を集めて演説したとあるが、二十日の富永日記を見ると、

八時半から出校する。今夜は先晩の益友会での奇妙な光景を呈したことに付いて、国木田先生から話したいことがあると云って、態々授業を休んで生徒に演説した。

自分は客人として来ているのではない。誤解しないで欲しい。いつも生徒のことを考えている。と話して九時半に散会した。学校が終って先生の発言で、飯沼・尾間・山口・河野栄吉との五人で自宅に集った。前から家に来ていた長田も加わって懇談し快談して、十一時にみんな帰った。と、ある。

独歩はまた印刷所の開設についてとても熱心であった。

独歩はこのように自分ではと信じたことはどこまでも貫き通そうとする一徹なところがあつたらしい。

次に

詩人と予言者は、別天地を与ふ。俗人は俗界に生死す。

この天地・山河・人情・人生のすべては俗人の心には俗視されて俗化してしまふ。ところが詩人はこれを詩に読んで、新色・新氣・新生命を吹き込む。

自分は予言者になりたい。予言者はシンセリテイに立つて、シンセリテイに宇宙人生を理解し、これを世の人に叫び教える人である。

と、述べて、自分もシンセリテイでありたいと希い、もしシンセリテイにならない時は読書と研究に精神を集中せよ。俗念から遠ざかつて純な心となり、忽ちシンセリテイに復することが出来る。一挙兩得である。

と、シンセリテイな人とならねばならないと、堅く心に決めてゐる。

二十三日の記に

朝認む

昨日早起、電信局に至り収二に發電して歸伯する勿れ、吾目算あり、手紙を以て通報すてふ意味を申送ると、ある。収二の歸伯を止め、自分に目算があると打電している。果してどんな目算があるのか。

次に

生れて死に至るまで、此一生。此天地に於ける此一生。

若し想像を以てすれば実に吾をして哀傷幽玄の念に打たれしむ。

と、人間の一生のことを考え

考えてみよ。無数の人々の一生は過ぎ去つた。日本に於て、支那・印度・ペルシャ・アラビヤ・小亜細亜・埃及・亜弗利加・羅馬・日耳曼・仏蘭西・英吉利・スカンデナビヤ・魯西亞・亜米利加・南洋諸島、世界中で無数の一生は各々が知らぬうちに知らぬ処で経過している。地球は小さいと言つても、人間の住家である。生れもし死にも凡ての人がする。歴史もこゝで経過した。この地球上の人間の一生、もし人間一人の一生に意味があると

すれば、悉く人類凡ての一生に意味がある。

さらばその意味はどこにあるか。或人はこれを感じ、  
或者は感じないで過ぎてしまふ。感じなくとも必ず意味  
はあるのである。

人生は空か、空であつたら凡てが空である。意味があ  
るか、人生を空と感じた人にも意味はあるのである。

自分はこの幽玄で神聖な生命をにない、この不思議な  
天地に於ける人間として、あらゆる人々の一生を見たい  
と思う。それによって自分自身でこの生命を感じ、意味  
・目的・希望があると感ずる。これは真理である。自分  
のソールがこれを感じる。凡てのソールが感じる筈であ  
る。自分はこの人間の一生を高尚で神聖で意味あるもの  
として見ようと考へている。墓の中に経過した一生は埋  
もれている。経過した一生は墓の中に埋れてしまつただ  
けか、死を冷やかな陰のように感じるが、果してそうか。  
墳墓はともかく一生の記念物である。

自分は何を書いたらよいか。それはこの「一生」の  
意味あることを知らしめるために書こう。「一生」を描  
く。多くの人の一生を描く。

と、人生に意義あることを信じ、この人生の意味を知

らせるために人の一生を描くことが、文士たるものの使  
命であると論じている。

#### 二十四日の記

田村三治君から来状。すぐ返事を出す。

収二に手紙を出す。そして志を励ます。

昨日水谷氏より来状。

昨朝、日置氏また来訪。石丸の一件である。自分が佐  
伯から去る日も遠き先ではないと思つた。

と、ある。日置氏は石丸の件についてどんなことを云  
つたのだろう。相まきつく詰問したのではあるまいか。

独歩は佐伯にはもう長く居られないと思つている。

田村三治に宛てた手紙は

教会盛の由奉賀候 当地教会も亦た多少振ふ也 小  
生が絶へず出席するを面白からずと思ふ連中あり、こ  
れが遠因となりて近頃一衝突起り、目下猶ほ奥歯に物  
のはさまりたる如くにて甚だ面白からず候 いざとな  
らば大いに気焰を吐き 然として此地を去る覚悟に候  
されど軽々しくは立たず。好みて人々と争ふは徳と智  
の人の為さぬ処、されど又た卑々屈々としても居られ

ず 事々熱禱を以てせば誤る事少なからんと存居候  
と、ある。勸告書事件以来の悶着に不愉快な心境を知ら  
せてある。

次に

夜更けて月光輝く。天地蒼然たり。人類の此の天地  
間に於ける命運を想ふ。

嗚呼、災厄・悲嘆・罪惡・不如意の支配者は何者ぞ。  
生滅する此の人間。此支配者は何者ぞ。盲目の意志  
か、否々、神ぞまします。神は善と真との神なり、心  
ある神ある也。

と、夜更けて寒月を仰ぎながら感慨に耽っている。人の  
命運を想像し、その支配者は誰ぞと問い、神にだけが  
っている。

次に

嗚呼、此の吾、何時か亦た此天地より滅せん、嗚呼  
神よ。

此の恐怖より救ひ玉へ。嗚呼恐怖より救ひ給へ。

と、死の恐怖におそわれて、自分は茲に生れている。自  
分を動かすものは何かと問うて、

嗚呼此のわれ、実の此の吾、これ何ぞや。燈は机上

にありて耀き、半朧の月は除々に昇り且つ昇る也  
と、吾々とは何かを考えて、この境遇、この時代、この  
関係、これが自分なのか、自分は境遇・時代・関係に動  
かされている。

この自分の眠りが支配し、虚栄が支配し、労働が支配  
し、疲労が支配し、肉体が支配している。

そしてまた生れてこの不思議な天地に囲まれて、その  
周囲に慣れてしまった。

と、人の世のはかなさを嘆いている。

## 二十五日の記

小さい我から離れて人間同胞のことに思いを馳せると  
同情心が湧いてくる。見よ。餓に泣いているものがあろ  
う。これは人の重荷である。夫に死なれて泣く寡婦もあ  
ろう。親を失った孤児もあろう。また一家が零落してい  
るものもあろう。何処でどんな不幸な人が月光の下で泣  
いるかわからない。

あゝ不幸な人間よ、悲しい人間の命よ、残酷な、この  
地上の世界よ。

死は、不幸を叫ぶ人の上にも、徳に輝く人の上にも、

罪に汚れた人の上にも、凡ての時代を通じ凡ての國の上に厳然として行われつゝある。凡ては死ぬ。喜びも悲しみも、善も徳も、最後は死である。なんと恐ろしい法則であることよ。

「自然」に叫びたい。転々として無窮の自然よ。この自然の懷の中にかように支配しられつゝある人間である。と、人の不幸、人の死を想い心から同情の念に燃えている。

次に

自分は俳優ではない。見せ物ではない。そしてこの吾は只だ一つの吾ではない。この吾の外に沢山の吾があつてこの天地間に存在している。バーンズも、ミルトンもクライストも、ポーロもみな一個の吾である。かゝる聖賢の人々だけではない。野で餓えている孤も、災厄で沈み切っている人も、戦に殺された兵も、凡て、他の吾である。

吾とは何ぞや。たゞ一個の境遇に支配され、自分自身の欲と情とにかられているものが吾か。あゝ吾とは何ぞや。人類とは何ぞや。自然とは何ぞや。

この吾、何の権利があつて自分のことばかり考えるの

か。自分はどうしてアフリカ人でないのか。どうして貧兒孤児でないのか。何故に罪惡の底に陥らないのか。吾は、この吾の外に無数の吾があることを考えよ。その吾の生涯のこと命運のこと、常に考え忘れてはならない。

この人類とこの大きな自然との關係はどんなか。と、自我を離れて他の吾を考える。この大切なことを云っている。これが同情心の起る本である。

次に

本日午後、大入島に舟行し、島を半ばめぐりて漫步す。帰宅は日暮れやゝ過ぎたり。帰宅後食事を了はりて直ちに教会に出席す。互の感話あり、祈祷ありたりと、ある。大人島へ舟で行き、島を半周したとある。甚だ簡単だが、富永日記には詳しく記してある。

二十五日 安息日の日和のどかにうらゝかなり。教会は十時に開きて十一時に閉づ。

午後より国木田・飯沼・尾間・並河・山口・田中・河野と九人、中島より一葉の小舟に乘じ緑々乗り出で、葛沖を漕ぎ、纜を大入島守後に繋ぎて、こゝより行く行かかねて予備せる饅頭を食ひつゝ島廻りを企てぬ。さなきだに和閑なる候の春風徐ろに吹きて早や寒から

ず未だ温かならず。蒼天は余りに晴れたるに失せずし  
て浮雲飄々白片光線に照らされては絹の帷幄を投げし  
かと思はれ、金の片に蒸発せしめたるかと疑はれ、時  
としては又点々として悪魔も来り降らすの有様なり。

春の波は風なく波立たず連波鱗々として織るが如く、  
日光反映して金鱗灼々として照らし、守後の北浜より  
眺むれば湖の如き外葛の港、坂の浦、又二栄の港、人  
家白垂二十又三十撒き散されて、壮嚴なる彦山脈の一  
連は其上に高く互れり。久保浦に至り山を越へ谷に分  
入り蹒跚崎嶇羊腸たる小徑を喘ぎ上りて荒網代の上に  
出でぬ。山頂より一望敢視すれば蒲戸の岬は目の下に  
おごそかなる形を以て東に向て斗出し、四国路は地平  
線上黛眉螺髪の有様手に取る如く見わたされぬ。内海  
は波静かに海島浮び戯れ帆影所々に頭はれて闊々中美  
はしやがて下りて村を過ぎ浜辺を伝ひて鞆鞆の島の夕  
日に映ずる絶景を見、石間をすぎて守後に戻れば、日  
は葛港のかなたなる山に曰つきて残紅天に沖し紫雲た  
なびきて黄昏己に至れり。舟に乗じて漕ぎ回れば海面  
盤の如くにして、のどかに海の中らに來りしころは、  
帰帆影かすかにして燈火頭はれ一つ二つと天に頭はれ

し星も次第に其の味方を殖して蒔絵の如く、葛の燈も  
点せられてこなたに一線の金糸を引けり。中川に入り  
ては潮の未だ満たざるため浅洲に乗謬し、かくするこ  
と幾度といふを知らず。八時の頃やふやふに帰りつき、  
九時にして教会に出席。十時頃開会す。会員相互に熱  
心に祈るあり談ずるありて散会す。あゝけふの安息日  
こそげに神聖にして楽しき日にてありき。

國師は我に此記を草せよといへり。之れ先日の約あ  
るためか、されば本日の真情は尚ほ彼の記に明にせん  
と、記してある。

この記を読んで驚くことはみんなの健脚ぶりである。  
現在の大入島は海岸沿いに立派な道路が開通し、坂越し  
をしていた処にはトンネルが通じている。昔は坂越しを  
したり山の中腹に作られた小さな山道を上ったり下つた  
りして歩いていた。荒網代から石間、守後へと通じる道  
は浜辺に作られた道を通っていたが、守後から久保浦へ、  
また久保浦から荒網代へ越す坂道は難道であった。昔は  
殆んど舟で渡っていたのである。

独歩が富永にこの大入島廻りの紀行文を書いてみよと  
云ったのは、先日富永に話したように徳富蘇峰に送って

紹介の一助にしようと考えたからであろう。富永は喜んで一文を作つて独歩に見せると、独歩はきびしく批評し一層励ましたという。

## 二十六日の記

古の人も今の人も、自分が苦んでいるように馬鹿げて意味もないことに苦しみ、意味もないことをしているようであつたら、人生は実に空虚なものである。世界はこの空虚の競争場であらうか。

吾とは何か。人類とは何か。意味のないものであればこの吾とは何か。

吾と云うものがその境遇によって限定され、その事情によって左右されるものであつたら、こんな吾は卑しむべきものであり、呪い、悲しむべきものである。

吾、茫茫たる天地間の孤客ならんや。吾とは人類也  
意、吾とは人類ならずや。

と、自分の価値を見直して、むなく感じるが、自分も人類の一人である。必ず意義あるものであると信じている。

次に、

国許に帰っている収二から手紙がくる。収二と父上に手紙を出す。金子馬次・水谷真熊両君から手紙がくる。と、書いて、次に

学生の退学云々の風説あり。又た馬鹿らしき出来事は来らんとす。吾、如何なる吾にて之れに当るべき。神・自然・人類・吾。吾をしてシンセリティーに感ぜしめよ。と、記してある。

この退校云々のことは、石丸敏一らの反対派のもの達、その後一層反対を強め、国木田を罷免せねば登校しないと云い、中には五ヶ月の欠席に及んだものもあつた。この日の富永日記を見ると、夜、鶴谷学館に出校する途中で国木田師に出会つと、話したいことがあると云うのでわが家に案内して話を聞くと、「鶴谷学館の下級生は一同で退学願書を差出したという。その理由がわからない。しかし邪推かも知れないが、あの石丸等一派のようなのがいる。自分が矢野文雄氏を攻撃したというので何か企んでいるのであろう。これを矢野崇拜の先輩たちが彼等をそのかしてこの様になつたのであろう。でなかつたら彼等にそんな勇気がある筈はない」と言つた。



自分もそうかと思つた。それから一しよに学館に行つたが、先生は何か気分がすぐれないと云つて十時で授業を打ち切つた。

富永はこの独歩の言葉に対して次のような感想を記してある。

青年はかくも腐敗せるかな。老輩はかくも朽枯せるかな。鶴谷学館何ぞ夫れ甚しきや。かの自から有志と称ふるの輩只だ一つ偶像の如くに矢野を崇拜し、以て彼等の理想となす。一言批判の入るあれば即ち云ふ罵言と。国木田師の怒る固より宜なり。而して奸策を以て師をやふやくにして疎んせんと計る。何ぞ愚にして曲れるや。没後悖徳の世とは宜なるかな。我はかの古の正義の士が世を憤りし所以を知る。我志通ぜず。我赤心頭はれず正義何れの所にか存すべき。然れども寧ろ憐れむべきなり。吾人や固よりかの輩と合はず。然れども吾人は進んで彼等を征服するか、然らずんば感化せんと欲するなり。而してかの輩に於ては如何？只だ猜忌を以て吾人を悪むなり。自からが防ぐなり。其理想や真に底にあり。

と、大いに憤慨している。

また、二十七日の富永日記を見ると、夜、鶴谷学館に出ると、中島翁が奇妙なことを語り出した。本校の乙級の生徒はみんな退学したと聞く。これは教師と生徒中の耶蘇たちとの不和から出たという。と、言った。

国木田先生に反抗するのは先生が耶蘇であるからである。あの無邪気な乙級の生徒たちを煽動しているもの的心が解る。と。これを聞いて怒りが心頭から発した。先生の苦衷に同情している矢先に、今こんな奸人たちの策を聞いて心から怒つた。自分の彼等に挑戦する。自分は戦う。彼等には先輩という盾がある。われらには正義の盾がある。どちらが最後の勝をしめるか。

と、中島教師の話聞いて怒り、どこまでも彼らと戦うと決意している。

このように独歩に対する嫌がらせは日を追うて益々濃くなつた。独歩はどんなに不愉快であつたことだろう。いよいよ佐伯を去る日決心したのはこれから間もなくであつた。

#### 二十七日の記

今朝、水谷氏に書状を発し、先度借用せし金二円を

返済す。

金子馬次氏に書状を発し、金一円を早稲田文学の代金として送附す。

河井大助氏に発信す。印刷所借用の件相談、依頼する所ありたり。

トルストイの「カザック」を読む。叙事の筆を学ばんとてなり。

と、ある。河井大助とは柳井印刷所の主人。その手紙は  
拜啓

諸君益々御清栄の段奉賀候 陳者小生未だ諸君に一面の識なき者に候処吾が父専八氏は多少諸君の御親交を被りし由承はり居候 然るに此度吾が父裁判所に職を失ひ甚だこまり居候処 思ひ立つ事ありて印刷業を試みんとの願起され己に諸君にも何とか談合之れありし事と承はり申し候 然るに吾家貧にして新たに印刷業を起す能はず あたかも諸君印刷業に従事せられ居る事を伝聞致し これこそ幸ひ若し譲り受くるを得ば如何ばかり幸ならめと 其の都盛にて吾父及弟 諸君に御願ひ申せし処諸君譲るを好まず且つ高値にてトテモ金が家に譲り受くる力なきを発見致し父上も甚だ失

望致され候由に承はり候 願くは諸君吾が父を憐れめかし 諸君若し吾父及弟の為めに諸君所持の印刷所を挙げて幾年間幾何かの借料にて貸与し給はゞ吾が父の喜び如何ぞや 吾が一家若し茲に柳井の地に業を得ば永く柳井の人となり及ばず乍ら土地の為めにも幾分の尽力致し得る事と存候

と、ある。宛名は河井大助様、並びに印刷所持主諸君となつてゐる。

次に

「様々の関係」という一種の著作を思いついた。その趣向は外でもない。自分と他のものとの関係を叙事するのである。「自分と小舟」とか「自分と少女」とか「自分と漁村」とか、「自分と一個の乞食」とか、或はまた「自分と写真」とか、その他に色々な面白い関係があるであろう。もしこれに十分の想像を加えて叙したなら、よい短編集が出来るであろう。どうだろうか。

と、著作を思いついている。  
次に

吾是那辺迄も俳優ならぬ事を希ひ、切に自ら省みると欲す。

俳優になるな。小さい我念にとらわれて只だ人前だけをつくろう俳優になるな、人類の一人としてこの天地の間に於て神聖な意味をもつ真実なものとして挙動したいと願っている。

自分は農夫になりたい。昔の予言者になりたい。南洋の民になりたい。偉大な帝王になりたい。茅屋の少年になりたい。幸運な貴公子になりたい。災厄に泣く児になりたい。これは形容した言葉ではない。喩えではない。自己的な考えからではない。自分は人類である。

農夫となって名もなく朽ちて何であろう。予言者であれば大きな責任ができる。貧民とあつて窮乏しても何であろう。帝王でも権勢が何であろう。少女であれば心は雪の如く清らかであろう。

嗚呼。吾は、此の吾は、決して一個の小イゴート、一境遇と、一事条の爲めに動かさるゝものならんや。

吾は人類なり。国木田哲夫は人類なり。

と、喝破し、小我を捨て、大我に生きる人となることを念願している。

四月の記について書く。

一日の記に

昨日の黒沢行を誌し置く可し（二日朝認む）

と、書いて青山村の黒沢の桜を見に行つたことを記してある。

昨日は日曜日、教会の人々と一しょに黒沢という処に桜見物に行つた。この黒沢の桜というのは、自分が佐伯に来てから度々耳にした処である。佐伯町から去る三里半の山奥にある。

拜礼が終つた後、同行者八人で午前十時半頃出発した帰宅したのは午後七時半であつた。

桜の花はもう散つていた。たゞ落花がちらちらするのを賞しただけであつた。われらはそれで充分満足した。

桜の樹は二本あるだけ、しかしそれが何百年経たかわからないほどの老樹で、世にもめずらしい大木である。立派な庵がある。東光庵という。そして次に

散りにけり いざ事問はん村びとよ

花のさかりをいかに眺めし  
と、詠んでいる。

（この項次号へ続く）